

城跡 | GOURMET うなぎ (領ヶ谷城)

今年の夏は異常に暑く、首都圏では過去に例を見ないほどの熱中症患者が救急搬送されたそうです。例年だと埼玉県熊谷市がその日の最高気温を記録したと、連日関西でもテレビ等で知ることができました。今年は大分県日田市や岐阜県多治見市の猛暑ぶりが報道していました。姫路もそこまで気温は上昇していなかったけれど、異常に暑いには変わりありません。こうしたなかでも、シャツを汗でびしょり濡らした人を姫路城では見かけます。そこで本号では、体力を消耗する季節に城巡りをしながら、疲れた体にスタミナが補給できるという、なんとも都合のいい城跡を紹介します。

場所は、埼玉県さいたま市南区(旧浦和市)。付近を南北に“産業道路”が走っています。この道路が川口市方面から二十三夜の坂を登ったところに行弘寺という寺があります。行弘寺は谷奥の台地上に位置しており、本堂を最高所に据え、境内地が谷底に向って下がる台地の斜面に展開しているため、産業道路の乗る台地上からは境内が狭く見えてしまいます。

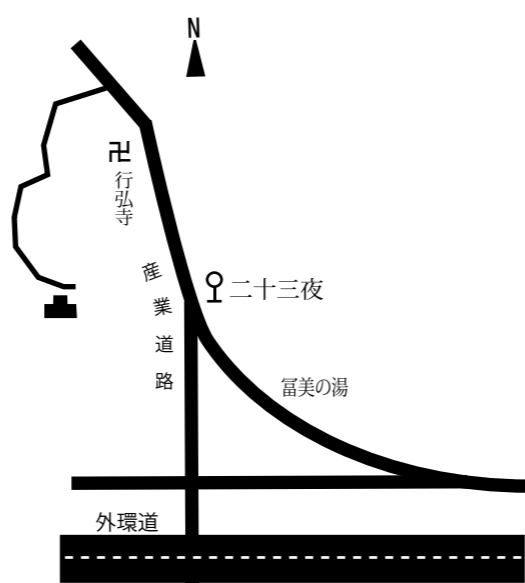
この寺の境内の谷を迂回して、産業道路から西へ入り組んだ細い住宅地内の道を縫っていくと、「名物うなぎ」の看板を出している「幸○園」という屋敷に突き当たります(写真1)。看板をよく見ると「旧領ヶ谷城址」とあります。城跡に店を構えているのを売りにしたうなぎの老舗です。

『埼玉の館城跡』(埼玉県教育委員会、1968年)によると、領ヶ谷(りょうがや)城は、城主が木内右衛門で天正

18(1590)年頃に廃城になったとされていますが、『日本城郭全集』4(人物往来社、1967年)では、治承4(1180)年、源頼朝挙兵の際、佐々木三郎盛綱が当地に陣城的なものを構築したという伝承を紹介しています(本書では領ヶ谷城ではなく、太田窪(だいたくぼ)城として項目を立てています。太田窪とはこの一帯の大字)。領ヶ谷城跡から北西に800mほどの場所に守光院という曹洞宗の寺があります。この寺は佐々木守綱によって建られたので、「守綱(しゅこう)」すなわち守光院になったという由緒をもっています。領ヶ谷城とは何らかの接点があったのでしょうか。



写真1 「旧領ヶ谷城址」の名物うなぎ



ところで、『埼玉の館城跡』には土塁や空堀が残っていると記されていますが、現在は宅地化され、そうした城郭遺構を観察することは不可能です。『日本城郭全集』4では、「近年まで空堀があったと伝え」られているとしているので、1960年代後半頃には城の存在を偲ばせる遺構はおおかた消滅していったとみられます。

しかし、城跡周辺を歩いてみると、この場所に城郭があったと伝承される理由もよくわかります。たとえば、写真2は城跡東側の現況写真です。城跡の南から東と西に谷地が大きく入り込んでいます。とくに東側は深く幅の広い谷地で、台地を大きくえぐっています。南側はいまも崖になっていて、その崖下にはかつて沼地(現在は遊水池)が広がっていました。つまり、この城跡の場所は台地の縁辺部で、舌状に張り出した先端に位置していたのです。城があったとすれば、三方を比高差の大きい崖で守り、台地続きはおそらく堀切や土塁を施したと推測されます。『埼玉の館城跡』で報告された土塁や堀は台地続きにあったのかもしれませんが。そして、うなぎ店に隣接する新田公民館の敷地の一角には「領ヶ谷山天満宮」という小さな社が鎮座しています(写真3)。「領ヶ谷山」という名に、このあたりの地形的な特徴がよく示されているといえるでしょう。

この神社脇の坂を下りたところの遊水池から見ると、写真3のように台地の崖を利用した懸造りのような建物が建っています。これがうなぎ店の座敷です(写真4)。ここからの眺めが店の目玉の一つになっているようです。この店のすぐ北西にも別の老舗うなぎ店があります。

旧浦和市はうなぎが名物で、多くのうなぎ店があります。江戸時代に近くの沼川で獲れたうなぎを提供したのが始まりで、次第に評判となり、中仙道を往来する人たちも立ち寄るようになったともいわれています。この店もその伝統を受け継いでいます。

もともと、中世の山城跡ではこんな店に出会えるはずありませんが、ときには、ちょっとおいしいものやその土地の名物を食べ歩き、ついでに各地の城跡を巡るというのも一興かもしれません。でも、“城屋”を自認し、堀や土塁など城跡の遺構を捜し求めてさまよい歩く硬派な“戦士”には、当城跡はあまりにも物足りないことをあらためて申し添えておきます。



写真2 城跡をめぐる谷(東側)



写真3 領ヶ谷山天満宮



写真4 城跡南側の崖を利用した建物